

受けた親切、人に渡そう

—— “Pay it forward” の連鎖 ——

北九州市立大学外国語学部准教授 齊藤園子

(2000-2001 年度ロータリー財団国際親善奨学生)

学生の時に、ロータリー財団国際親善奨学生としてスコットランドのエディンバラ大学に留学する機会をいただきました。日本と現地双方のロータリアンに支えられながら、とても充実した時間を過ごしました。そのような留学の機会をいただいたことに感謝するとともに、この時の経験を “pay forward” することができればと思いつつ、この文章を書いています。

“Pay it forward” は、この留学中に知った言葉です。留学先の大学には当時、希望すれば、留学生と地元の家庭との間を取り持って交流の機会を設定してくれるプログラムがありました。私も登録しておりましたら、小さなお子様をお持ちのご夫妻と知り合いになることができました。最初に会った時にお二人がおっしゃったのが、「日本で受けた親切を “pay forward” できると良いと思っている」という言葉でした。ご夫妻は以前に、研究会で大阪を訪れたことがあるとのことでした。真夏の強烈な暑さに、ホテルと会場との往復だけになってしまい、観光はあきらめていたそうです。その矢先、研究会で偶然に知り合った男性が、大阪から東京まで車での観光案内を申し出られて、その善意に非常に感動したとのことでした。そしてその親切を、その人に返すことはできないけれども、次に渡していくことができればと思っている、と話されたのです。

このご夫婦の言葉は、*Pay It Forward* という、同名の小説に基づいて制作された 2000 年の映画⁽¹⁾を意識したものでした。子役のハーレイ・ジョエル・オスメントが印象的な演技をしている映画で、エンディングに涙した方も多いいと思います。この映画が、一考に値する考え方として視聴者に提示するのが、“pay forward” の心です。親切な行為を受けたら、その善意を “pay back” する（親切を与えてくれた人に返す）よりも、“pay forward” する（次に渡していく）ことに努める方がよいという精神が描かれています。映画の中では、「世界をより良くするために、自分に何が出来るかを考えよう」という社会科の先生の問いに応えて、中学 1 年の少年が「世界を変える方法」として発案したものです。1 人が 3 人に渡し、さらにその 3 人がそれぞれ 3 人に渡していけば、善意は自己完結することなく、地域を超えて世界に連鎖と展開していくというわけです。

映画の中ではこの発想について、「ユートピア的」、「人の善意を信用できるかどうかは左右される」といった限界も示されます。人から人への善意の受け渡しがうまくいかず、この案は失敗したと、少年がなげく場面も出てきます。しかし映画全体としては、「世界はそんなに悪い場所ではない」というメッセージを印象づけるとともに、人の善意を信じて世界に働きかけようとする事の尊さとその価値とを認めていると言えるでしょう。少年の試みと並行して、この「運動」が、少年が住むネバダ州の荒涼とした土地から、人を経て西海岸の大都市ロサンゼルスへと広がる様子が描かれているのです。

2000年以來、世界情勢は大きく変わっています。しかしそれでも、“pay forward”の心が世界を変える可能性を持っていることに変わりはないと思います。ロータリー財団の方々をはじめ、私の留学に関わってくくださった方々の支えを考えると、この言葉が思い出されます。私の留学は、日本でご夫妻に声をかけられた方の善意にも支えられていることになるのです。その私自身が、様々な方から受けた善意をさらに先へとつなげる橋渡しとなれるよう心がけていたいと思います。

(1) *Pay It Forward*. Dir. Mimi Leder. Perf. Kevin Spacey, Haley Joel Osment, Helen Hunt, et al.

Warner Bros., 2000. Film. 邦題：『ペイ・フォワード 可能の王国』

映画情報：

IMDb <http://www.imdb.com/title/tt0223897/>

Movie Walker <http://movie.walkerplus.com/mv31913/> など